

# 第1回 大戸川ダム環境保全委員会 議事概要

■開催日時：令和4年10月31日(月) 10:00～12:00

■開催場所：コラボしが21 3階 中会議室1

■出席者：

<委員>

大谷 一弘 環境省希少野生動植物種保存推進員【植物】  
萱場 祐一 名古屋工業大学 教授【河川工学】  
◎小林 圭介 滋賀県立大学 名誉教授【植物】  
坂根 隆治 日本鳥学会 会員【鳥類】  
角 哲也 京都大学防災研究所 水資源環境研究センター 教授【河川工学】  
前田 喜四雄 奈良教育大学 名誉教授【哺乳類】  
松井 正文 京都大学 名誉教授【両生・爬虫類】  
松田 征也 日本魚類学会・日本貝類学会 会員【魚類】  
山本 雅則 日本甲虫学会 会員【昆虫類】

(委員氏名は50音順、◎印は委員長)

<オブザーバー>

滋賀県、大津市、栗東市、甲賀市

<事務局>

国土交通省 近畿地方整備局 大戸川ダム工事事務所

■議事概要

## 1. 開会

・大戸川ダム工事事務所長より開会の挨拶

## 2. 委員紹介

・事務局より各委員の紹介

## 3. 委員会の設立

・事務局より委員会の規約、委員会の公開要領の説明

## 4. 委員長選出

・小林委員を委員長に選出（事務局からの推薦、全会一致）

## 5. 議 事

### ・環境調査計画について

事務局) 環境調査計画(案)について資料-3を用いて説明

委 員) 試験湛水の期間、時期はどれぐらいになるのか。

事務局) 試験湛水計画については現在検討中であるが、過去に行った概略検討の結果から、試験湛水を開始し、満水に達した後、元の状態に水位が低下するまで1年程度の期間がかかるかと想定している。

委 員) 魚類に関しては、ダム建設による河川の連続性の変化や、ダム下流の生息状況の変化に留意して調査してもらいたい。なお、漁協がアユ・マス類を放流しているため、聞き取り調査を行うと良い。底生動物の調査では、淡水貝類の生息状況についても調査してもらいたい。

事務局) ご意見をふまえ調査を実施する。魚類調査では漁協への聞き取り調査も予定している。また、ダム建設による河川の連続性の変化について予測・評価を行う方針としている。

委 員) 陸域生態系の上位性でサシバを注目種としているが、生息時期や餌動物の観点から妥当であるか。年間を通じて当該地域に生息する種の中で、他に注目種とすべき種はいないか。

事務局) 哺乳類等も含めた過去の調査結果を見る限り、サシバが上位性の注目種として適切と考えられること、過去に実施した環境影響検討においてもサシバを注目種として選定していることをふまえ設定している。今後の調査において過去に確認されていなかった上位性として適切な種が確認された場合は、委員と相談の上、注目種の設定について適宜検討する。

委 員) 外来種についても留意して調査を行う必要がある。また、ダムが建設された場合、外来魚が違法に放流されて問題になるケースが多いが、どのような対策等を考えているか。

事務局) 調査により外来種が確認された場合は、関連法等に基づき適切に対処する。確認された外来種が、現地の生態系を相当に脅かすような状況であれば、対応について委員と相談する。なお、大戸川ダムは流水型ダムであるため、ダム完成後に外来魚が放流される可能性は低いと考えられる。

委 員) 哺乳類に関する調査計画については問題ない。

委 員) ダム建設後の平常時および洪水時の流況・土砂動態・生物の移動性等について、大戸川ダムのコンセプトを整理し、シミュレーション等の予測検討を着手可能なものから順次実施することが望ましい。その上で、追加調査等の必要性について再確認し、合わせて委員会に早めに提示することが望ましい。

事務局) 指摘のとおり検討が必要と考えている。現在並行して実施している検討もあるため、検討結果がまとまり次第、委員会に提示する。

委 員) 平常時および洪水時の水位の状況、湛水した際に斜面地の動植物や環境がどのような状態になるのかなど、流況シミュレーションを行い整理してもらいたい。また、他の流水型ダムの事例等を収集し、ダムの開口部(ゲート)の大きさや、カワガラス等の鳥類が開口部を通過して移動している状況の有無等について情報を整理してもらいたい。なお、陸域生態系の上位性の注目種としてサシバが選定されているが、本種は夏

鳥のため、現地調査の結果をふまえ、可能であれば年間を通じて生息する種をもう一種追加するとよい。

事務局) 開口部のカワガラス等の移動については、他ダムの事例を収集し、今後の予測・評価に活用する。

委員) 調査結果をふまえ、過去に整理されている環境類型区分を再精査するとともに、河床材料の状況も追記すると良い。また、河川域生態系の各調査地点における確認種を整理し、環境類型区分の妥当性を確認してもらいたい。また、試験湛水により長期間冠水することで環境が一時的に消失しても、その後は回復することも想定されることから、試験湛水時及び供用段階における影響の予測については、流水型ダムの特徴もふまえ、予測方針を今後整理してもらいたい。

事務局) 環境類型区分については、今後の調査・予測の中で再整理する予定であり、その際に河床材料の状況の追記も行う。試験湛水の予測方針については現在検討中であり、先行事例も参考に、予測手法を今後設定する。

委員) 植物について、過年度調査において確認されたものの同定に至っていない種や同定が困難な種は、過年度調査結果等も参考に、開花期に留意し、他項目の調査時に併せて確認するなどの工夫もされるとよい。なお、湿地性の種が生育している可能性があるため、水田と併せて休耕田・放棄水田およびその畦畔も調査時に確認するとよい。

モミやヒメコマツ等の大径木は、その地域のランドマークとして伝承文化や観光資源に関わっている可能性もあるため、情報を集めるとよい。

また、植生図等には図示されないマント群落やソデ群落は森林にとって重要な働きをしていたり、重要種が生育していることもあるため、それらの調査も実施するとよい。

事務局) 指摘をふまえ現地調査を実施する。

委員) 地形及び地質について、「土壌に係る環境」等の記載があるが、土壌について評価を行うことにはなっていないため、「土壌」の表現は不要と考える。また、大気質に関しては、濃度分布を予測し最大濃度着地点において配慮の必要性を判断するといった考え方も、今後検討するとよい。

委員) 大戸川ダムは 280m<sup>3</sup>/s 一定量放流とされているため、湛水時でも細粒分は洪水調節地内に沈降・堆積する前に下流に排出されることが予想される。平坦部など部分的に堆積する可能性はあるが、それらの箇所についてはダム建設時に河道を整えてスムーズな流砂を確保するなど検討されたい。

事務局) 今後、土砂の移動・堆積について検討を行い、大戸川ダムのコンセプトを明確にした上で、予測結果を委員会に提示する。

#### ・環境調査スケジュールについて

事務局) 環境調査スケジュール案について資料-5 を用いて説明

委員) 第 2 回委員会では本日出た予測評価等に関する意見に対する対応について確認する、第 3 回委員会では調査結果及び予測評価結果について議論できるという認識でよいか。

事務局) そのとおりである。

## 6. 閉 会

- ・大戸川ダム工事事務所長より閉会の挨拶

以上